

## エッセイ

### ジャン＝レオン・ジェロームの「仏陀」と「獅子」

稲賀 繁美

ジャン＝レオン・ジェローム (Jean-Léon Gérôme, 1824-1904) といえ、二十世紀冒頭の段階で、世界でもっとも著名な画家だったといつてよい。パリ美術学校の終身教授の3名の一人として、なお現役最長不倒距離を更新中だった。古代ローマのコロセウムを舞台として、キリスト教徒をライオンに喰わせる殉教惨劇の場面は、往年のハリウッド映画超大作『ベン・ハー』などに利用された。2010年、オルセー美術館で遂にこのアカデミーの巨匠の回顧展が開催された。官展派の権化というべき大物の復権が「十九世紀美術の殿堂」で実現する時代となった。それは25年前のオルセー開館の時点では、およそ「想定外」だった。

そのジェロームには、フランス語の題名では『仏陀に祈願する日本女性』と誤記(?)された油彩作品が知られる。別段誇るべき業績でもなんでもないが、誰かがこの作品を構成する図像要素を一応洗いなおしておく必要があるだろう。中央上部で朝日を受けて輝くのは、当時、ヨコハマ写真でよく知られた、鎌倉の大仏の写真を利用した仏陀、ではありえない。

寸法からみても、銀行家アンリ・セルヌーシが1871年の日本滞在の折に目黒の幡籠寺から買い取り、モンソー公園の私邸に飾った丈六の阿弥陀仏がモデルだろう。大仏買収の顛末については、同行のテオドール・デュレが私記を残しており、フレデリック・ディッキンズが専門的な解釈を述べているほか、幡籠寺側の日鑑にもその詳細が記録されていることは、もう四半世紀前の拙博士論文ほかにも報告した。当時の雑誌には、ヨコハマで船に積み込んだが重過ぎて船が傾ぐので、船の中央に鎮座させねばならず、そのため船の機関のボイラーを脇に除けねばならなかった。マルセイユから汽車の荷台に乗せたものの、トンネルで御尊像の頭が間えた、といった冗談のホラ話がまことしやかに掲載されている。

それではこの阿弥陀仏を戴く祭壇の、石造りの階段はなんだろう。まさか神社の参道のどんつきに仏陀を配するといった創作をジェロームが企てたとも思われぬ。さてはこれかな、と近年得心がいったのは、上野の大仏である。生田誠氏の著名なコレクションにも含まれる絵葉書を見れば、このいささか特異な配置の発想源に、上野公園の石段があつたらしいことも、推定がつく。画面左手の満開の桜が、出所をそれとなく示唆している。

絵葉書研究家の細馬宏通氏によれば、こうした種探しは、昨今人気アニメなどのロケハンをめぐる活況を呈しているのだそう。『けいおん!』には、保存運動で有名になった滋賀県の豊郷小学校の校舎から、京都市内の変哲もない町並みまでが、舞台として縦横に取り込まれている。その現場確認サイトがウェブで異常増殖を遂げ「聖地巡礼」の成果報告や「絵馬祈願」が「けいおん map」としてツイッターでブレイクして久しい、という。

ジェロームの仏陀も、ご同類の種探し遊びに感染しやすい好事家の琴線に触れる代物だ。

両手を挙げて、不可解な仕草で仏陀に祈祷を捧げる、神官だが武士だか不明の人物。彼はどこかで女性に性転換を遂げた模様だが、その衣装や、背に乗せた不釣合いに大きな矢立、ないしは琴のような楽器については、専門家の考証にお任せしよう。あるいは菊池容斎の『前賢故実』あたりにヒントがあるかもしれない。右手の花も躑躅ならば季節がずれる。細馬氏によれば、こうした類の探索は、個人の手柄とするより、公開してタグを付けてもらうほうが有効とのこと。その貴重な助言に従って、会員諸賢のご援助に期待したい。

そのジェロームを1900年のパリ万国博覧会のおりに竹内栖鳳が訪ねているが、どうしたわけかこの事実は、あまり広く知られていない。日本人の静物画は悪くないが、動物や人体に至っては解剖学がなっておらん、とジェロームは指弾して、自らのライオンのスケッチを示した、と栖鳳の聞き書きにみえる。とすればどうだろう。帰国後に西欧にあやかって栖鳳と改名し

たこの画家は、直後に金屏風に墨の筆跡も見事な《獅子》を作成するが、これらがジェロームへの敵愾心を秘めた写実的な獅子だったことは、もはや疑い得まい。

官展派の巨匠ジェロームの日本趣味と、その日本への思わぬ帰趨について駄弁を弄した。

2012年5月20日

補注： 葛飾北斎の『葛飾新雛形』（西暦1836年）は、刊行予定3巻のうち最初の1巻のみの出版で、そこには大工仕事と建築の意匠が、一般読者向けに図示されている。そこに見える「大工ノ頭」の冠が、どうしたわけか、ジェロームの仏陀に祈願する「日本女性」のそれと、同一の烏帽子（?）である。神官の衣装などにも見られる冠であり、衣装史の専門家のお知恵を拝借したいが、当時欧州でも閲覧できた例として、付記しておきたい。

#### 文献注

稲賀繁美「デュレを囲む群像」平川祐弘（編）『異文化を生きた人々』中央公論社、1993年、358-361頁。平野重光『栖鳳芸談』京都新聞社、1994年、86頁。井口悦男・生田誠『東京今昔歩く地図帳』学研ビジュアル新書、2010年、109頁。Gerald M. Ackerman, *Jean-Léon Gérôme*, ACR edition, 2000. *Jean-Léon Gérôme (1824-1904) L'histoire en spectacle*, Skira-Flammarion, Getty Center, Musée d'Orsay, 2010.

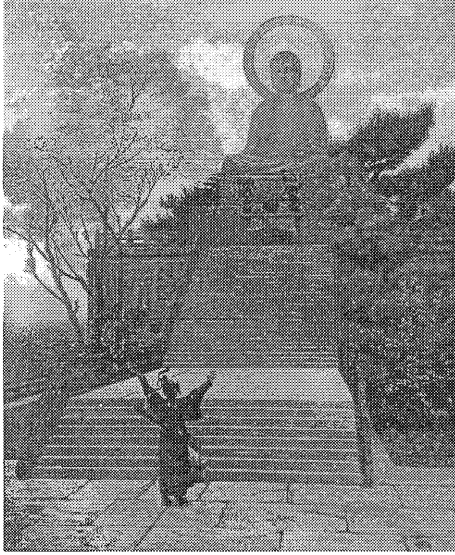


Fig.1 《仏陀に祈願する日本女性》  
71 x 59.1 cm 個人蔵、  
G.M.Ackerman Cat. No 482.



Fig. 2 《目黒の大仏》  
パリ、セルヌーシ美術館  
Louis Gonse, *L'Art japonais*、1883 掲載挿絵



Fig.3 《上野大仏》  
絵葉書、写真撮影者不明、1900年頃、生田誠コレクション。



Fig.4 ジャン＝レオン・ジェローム《勝ち誇ったアモール》  
1889年、99.7-160cm、個人蔵(部分)



Fig.5 竹内栖鳳《金獅子》1901年頃、三重県立美術館蔵

## 編集後記

『ジャポニスム研究』32号をお届けいたします。昨年に引き続き、多くの会員諸氏の協力を得て、編集は会報の担当者で行いました。

今回の表紙は、『KATAGAMI Style』展に出品された作品の一つです。今号の展覧会評にもあるように、『KATAGAMI Style』展は本学会会員の諸氏がコミッショナーとして関わられ、型紙とジャポニスムに関する長年の研究の成果が結実された展覧会でありました。

今号も、多くの会員諸氏のご投稿下さり、論文、展覧会評、シンポジウム報告、そしてエッセイと、大変充実した内容となりました。国際シンポジウムや見学会、研究発表などを中心とした例会報告も充実しており、ご参加いただけなかった会員のみなさまにも、学会の活動をお知らせすることが重要であると考えております。御執筆下さいました会員の方々にお礼申し上げます。また、助成をいただきました石橋財団に心よりお礼申し上げます。今後とも会員諸氏におかれましては、本学会の活動に御支援、御協力賜りたくお願い申し上げます。

(高波真知子・小野文子)

## ジャポニスム研究 第32号

Studies in Japonisme, No.32

(『ジャポネズリー研究会会報』後継誌)

編 集 高波真知子 (会報編集担当)

小野 文子 (会報編集担当)

論文査読 論文査読委員会

発 行 ジャポニスム学会

東京都新宿区荒木町 5-14 ネオ荒木町ビル 2階

榎ワールドミーティング内 ジャポニスム学会事務局

*Society for the Study of Japonisme*

*2F Neo-Arakicho Bldg., 5-14*

*Arakicho, Shinjuku-ku Tokyo 160-0007 Japan*

TEL (03)3350-0363 FAX (03)3341-1830

E-mail japonisme@world-meeting.co.jp

2012年11月10日

制 作 (有)オメガ印刷

*Printed in Japan, ©2012 Society for the Study of Japonisme*

学会 HP アドレス <http://www.world-meeting.co.jp/japonisme/>

郵便振込 振込先 口座番号 00100-7-558061

ジャポニスム学会